

## 『邪馬台三国志』 目次

**倭国の生い立ち** ◇王朝の変遷 ◇倭国／倭奴国の国のかたち

◇本書の王系譜 ●那珂つ国 ◇海神と不老長寿の仙薬・蓬莱郷づくり

●天之国とオロチ敵之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族 ●倭国王朝の建国

**倭奴国王朝** ●豊葦原中つ国と伊都国の王朝

●倭奴国王朝／安曇族の渡来

**倭国大乱と邪馬台国** ◇南伝仏教の東アジア流入 ●神国と常世づくりと伊奘諾

●豊受皇太神 ●倭国大乱 ●伊奘諾の南遷 ●二人の天照大（御）神

**東西の王朝** ●日神の出現 ●天石窟 ●オロチ退治 ●天日槍襲来

●天照大神、高千穂宮へ／饒速日の天降り

●葦原中つ国平定 ●瓊瓊杵の出現 ●火瓊瓊杵の天降りと日前

●日神の畿内遷座 ●天照大神（高皇產靈）の湖西高島宮と天成神道

**倭の女王** ●倭の女王ヒミコと纏向上之宮／日前の西都と日高見国の東都

●皇子の交換 ●女王の朝貢 ●海幸彦と山幸彦 ●内部抗争

●火明饒速日（海幸彦）の天降り ●女王の伊勢遷座

**日本王朝と日前の対立** ●女王トヨ ●一都七道制 ●天神火明饒速日

●太子 磐余彦 ●景行の熊襲征伐 ●和王 磐余彦（山幸彦の孫）

●仲哀の熊襲征伐

**天下は一つ、家は一つ（神武東征）** ●東征出発 ●筑紫国の奪還

●新羅遠征 ●吉備征伐／高島宮／出雲征伐 ●生駒の敗北

●熊野上陸／熊野権現の神倉山垂迹

●日前宮の創祀／日本に迫る ●日本の降伏

**大和朝廷の成立** ●橿原宮 ●日本武尊の北伐 ●大和朝廷のはじまり1

●大和朝廷のはじまり2 ●皇祖皇宗に奉る郊祭

## ◇王朝の変遷

I 那珂つ国<sup>なかつくに</sup> 五帝期黄帝の一門（地の神）＋后土の国（黄泉国） ↓福岡平野に都す……前二十四世紀

II 那珂つ国<sup>なかつくに</sup> 天<sup>あめ</sup>之国（太伯・呉王夫差の子孫、天（太陽）や日の神を崇拜）、天地<sup>あめつち</sup> ……前五世紀中頃  
↓福岡平野の那珂川流域に都す

III 厳<sup>いつの</sup>之国<sup>のくに</sup> 夏后帝小康庶子・越王句踐の子孫、越オロチ族↓福岡平野に都す ……前四世紀後半  
一門を各地に策封↓吉野ケ里（伊都国）、吉備（？）、出雲（佐太国）、摂津（小千族）、  
奈良盆地（三輪オロチ、三輪氏）、北陸（越のオロチ、越智氏） 那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

IV 倭<sup>ヤマト</sup>国<sup>のくに</sup> 天（厳）之国十日高国（韓一門）、高天<sup>たかま</sup> ↓唐津湾岸／福岡平野に都す ……前二二〇年頃

V 豊葦原中つ国<sup>とよあしはらのなかつくに</sup> 天（漢一門）＋葦原家（厳之国一門）＋中つ国 ……前二世紀後半  
↓福岡平野の早良／春日に都す。厳之国本家↓宗家の宗像家に祭り上げられ、玄海・宗像に閉居

VI 伊都<sup>いづ</sup>国<sup>のくに</sup> 吉野ケ里のオロチ族十大倭家 ……前一世紀中頃  
↓吉野ケ里から福岡平野の春日に乗り込み、糸島平野<sup>いと</sup>怡土<sup>と</sup>に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

VII 倭<sup>ヤマト</sup>奴国<sup>のくに</sup> 倭<sup>たかま</sup>（高天）＋豊葦原中つ国、天地<sup>あめつち</sup> ↓怡土<sup>いと</sup>に天宮（天上の都）す ……一世紀前半  
倭国大乱 倭奴国<sup>やまと</sup>王朝↓三つに分裂 ……一八〇年代中頃

副都オロチ勢・豊葦原瑞穂国 倭<sup>ヤマト</sup>・日隈<sup>ひかま</sup>・大山祇神ら中つ国勢

豊葦原中つ国

畿内<sup>きい</sup> 日向<sup>ひな</sup>・熊襲<sup>くまざり</sup>

出雲

邪<sup>や</sup> 厳之国<sup>いつののくに</sup> 天（厳）之国<sup>あめののくに</sup> 高天<sup>たかま</sup> 天<sup>あめ</sup>之国<sup>のくに</sup> 高千穂宮<sup>たかちほのみや</sup>

素戔鳴<sup>すさな</sup> ↓豊葦原中つ国建て直しに失敗

馬<sup>うま</sup> 天（厳）之国<sup>あめののくに</sup> 日隈<sup>ひかま</sup> 日前<sup>ひのまえ</sup>、妻国<sup>つま</sup>、投馬<sup>つま</sup>、狗奴<sup>くぬ</sup>

大己貴<sup>おほのお</sup>（素戔鳴の兄） ↓葦原中つ国再建

台<sup>たい</sup> 日本王朝<sup>やまと</sup>（珠城宮） 熊襲<sup>くまざり</sup> 和王朝<sup>やまと</sup>（高千穂宮）

雲

神武（和王磐余彦） 東征

VIII 大和朝廷 和国と大倭国が一家になった大和家に豊葦原中つ国・日本・厳之国を併合 ……二八五～二九〇年代末  
……三〇一年

# ◇倭国／倭奴国の国のかたち

倭国王朝<sup>やまと</sup> 天<sup>あめ</sup>（**厳**）之国<sup>ひだかり</sup> 十日高国（戦国七雄・韓の一門） 高天<sup>たかま</sup>

前二二〇年頃成立

倭国王朝

高天

天（**厳**）

天

天（日）

日の神

南方系銅鏡

天（水）

水の神

鉄剣・鉄刀

水穗国

天（火）

火の神

弓矢・鏃

水穗国

天（水）

水の神

銅剣

北方系銅鏡

日限

〔国の祭器〕

太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀

〔かつての祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝七、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬

倭奴国王朝<sup>やまと</sup> 倭<sup>やまと</sup> 十豊葦原中つ国<sup>あめつら</sup> 天地

倭国<sup>やまと</sup> 天（**厳**）之国<sup>ひだかり</sup> 十日高<sup>あめつら</sup> 高天 一世紀前半成立

倭奴国王朝

天地

倭

天（**厳**）

天

天（日）

南方系銅鏡（八咫鏡）

高天

日高

水穗国

天（火）

弓矢・鏃（天鹿兎弓・羽羽矢）

水穗国

天（水）

水の神

銅剣（天叢雲劍）

初代天神の女帝 天常立  
初代倭王 女帝の入り婿

豊葦原中つ国王・国常立

豊葦原中つ国

（豊国 火神、葦原家 越オロチ族、中つ国 地の神）：玉類

〔国の祭器〕

太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀

〔かつての祭器〕 那珂つ国：死返玉など玉つ宝七、厳之国王朝：蛇の領巾など瑞宝十種、熊族：熊の神籬他

奴国<sup>な</sup> 中つ国、后土国<sup>うしつこ</sup>

闇見国 月夜見国、黄泉国

三世孫倭宿禰（珍彦）——武振熊

兒天香語山——孫天村雲——天忍人（亦名倭宿禰

饒速日命亦名天火明命——兒天香語山命——孫天村雲命——天忍人

※  
:  
養子

倭宿禰(珍彦)——武振熊(神功將軍)

火明饒速日——天香語山（高倉下）——天村雲——天忍人

→ 皇子の交換（天神の

火照（海幸彦、火明）

火スセリ（海幸彦襲名）

○ 磐余彦（神武）

301年に大和朝廷樹立

武：崇神：応神——仁徳

神功

3 委亦亦曰百襲臣

天火明／火明饒速日

景行

成務  
⋮

綏靖 — ○ — ○ — ○ — 孝靈 — 孝元 — 開化 — 崇神

.....

四世紀

垂仁—景行—成務—仲哀—  
応神

牙馬台の天神・倭王・者耆

## 【本書の王系譜2】

## 「大日本王の系譜」

綏靖 — ○ — ○ — ○ — ○ — 孝靈

## 「邪馬台国の系譜」

彦狹嶋  
吉備津彦  
孝元  
倭迹迹日百襲姫（倭迹迹姫、三代女王）  
崇神  
開化  
大足彦（天火明の児、景行）  
倭姫（天火明の児、五代女王）

山王、大蛇

熊野櫛御氣野、倭大物主

天照皇太神、豊受大神

豊受皇太神（天照大神）

高皇產靈

倭女王

1 ヒミコ

敵之御魂天疎向津姫

2 トヨ

彦湯產隅

3 倭迹迹日百襲姫

3 / 4 神功 ..... 5 倭（迹迹）姫

武内宿禰

向津姫

日神の天照大御神

## 「高天系の系譜」

大倭豊秋津島姫

万幡豊秋津姫

栲幡千千姫を襲名

思金

宗像三皇女（田心姫・市杵嶋姫・湍津姫）

熊野クス日（五皇子の一人、五十猛、天日槍）

忍穗耳

高皇產靈の養女

天照大神の養子

饒速日（天鹿兒山の児、忍穗耳家に移籍し大倭降臨）

天火明（天鹿兒山の児、忍穗耳家に移籍し大倭降臨）

火瓊瓊杵

木花開耶姫

火照（海幸彦、火明饒速日として大倭降臨）

火火出見（山幸彦、天火明の児・誉津別）

火折↓大倭に降臨し誉津別と名のる

火スセリ↓海幸彦襲名

## 【記紀の王系譜】 皇統万世一系

日神 — 忍穗耳 — 火瓊瓊杵 — 火火出見 — ○ — 磐余彦 — 綏靖 — 開化 — 崇神 — 垂仁 — 景行 — 成務 — 仲哀 — 応神

## 倭国の生い立ち

### ●那珂つ国

縄文中期中頃(四五〇〇年前)になると、寒冷化が始まって関東や中部の遺跡は激減した。逆に、近畿を中心とする西日本のそれは急増しつつあった。このことは気温の降下期とも合致しているが、黄帝一門が四三〇〇年前に日本列島に渡ってくることや、水田稲作が中国大陸から四方八方に広がることも無関係ではあるまい。そこで、こう考えたがどうだろうか。

「黄帝のやり方を真似た彼らは、仁徳・慈愛の政を謳って福岡平野に神仙の国(神国)、那珂つ国を立ち上げると、東西南北四方に忠臣の四力国を配置して国邑を守ってきた。

その四力国とは、土の神を称えて后土末裔と自負する北の黄泉国こうせん(鬼国、闇見国くらみ、月夜見国よみ、宗像・玄海から博多湾・玄界島にかけて展開)、

同じく、地の神を祀って黄帝一門と称する国東の杵築国、

火神を奉って炎帝(神農氏)子孫と語る南方の火の国・その配下の熊族(熊本平野以南に展開)、

そして水の神を信奉する西の海神大神わたつみ(筑紫平野より西の海岸地帯を守備)だった」

〔**玄界灘沿岸の地名**〕、**博多近くに那珂、那珂郡、那珂川の地名があり、その北に暗黒の幽冥界を連想させる玄界灘、玄界島、玄海の地名が残る。**

後期(四〇〇〇年前)に入ってしばらくすると、東北北部に活気が戻ってきた。同じ頃、世界の各地で祖霊に見立てた巨石を取り巻く環状列石、祭祀場らしき列石や支石墓が次々と造られた。後期半ば(三三〇〇年前)には、注ぎ口のある壺が北海道から東日本・中国・四国へと広がった。後期末(三〇〇〇年前)に近づく頃、海草と海水を混ぜ合わせて天日で濃縮し、これを専用土器で煮詰める塩づくりが陸奥湾・三陸海岸・仙台湾・東京湾・渥美湾の沿岸部で流行した。

同じ頃（前一一〇〇年代後半、三二〇〇年前）の中国では、七百年間も続いた殷の天下が揺らぎ始めた。将にこの時期、太伯が周の太王・古公亶父の長男として、ついで周王朝の皇祖となる末子の文王が誕生した。

その頃、気温がさらに下がり、寒冷期に突入していた。そのため、中部・北陸・東北では粟など実り豊かな広葉樹が枯れてしまい、寒さに弱い里芋や山菜の収穫も急激に落ち込んだ。

それまでは食料に不自由しなかった土地であっても飢饉が多発して、幼児らが次々と死に絶える危機に直面した。このことが縄文時代の奇妙な土偶や呪術、はたまた謎めいた風習を流行らせたとする説もあるほどだ。

その当時、那珂つ国一門はどうしていたのか。彼らは神国三昧に明け暮れる中で、漁労・狩猟・山の幸の採取に精を出す一方、時節を見計らって台地や丘陵を焼き払い、そこで粟・ヒエ・ソバ・陸稻などの雑穀類や豆・イモ類を栽培して収穫を心待ちにする半農生活に入っていた。それは炎帝（神農氏）時代から伝わる焼畑農法だ。当時の民衆の生き様はどうだったのか、また那珂つ国はいかなる考えの下で政を行ってきたのかについても、多少は知る術がある。前述した『漢書』『地理志』の記事がそれだ。

民衆の暮らしぶりについても、後期末から晩期初頭（前一〇〇〇年頃）にかけての広田遺跡の状況から、そこそこ知ることができる。

こうした宗教・農法・生活習慣を背負った那珂つ国の軍勢が、山陽道・山陰道を突き進んで出雲・安芸・吉備・畿内に乗り出して分国を立ち上げ、先住民らに神国づくりや焼畑農法を教えてきた。後期



末から縄文晩期になると、奈良盆地に出先機関を設けたり、東勢と交易するなどしたらしい。これは、広田遺跡や橿原遺跡などからしかと見て取れる。

【広田遺跡】（福岡県糸島市）、縄文後期末から晩期初頭にかけての遺跡。埋甕・小竪穴・大溝などの遺構が見つかり、大溝からは多量の縄文土器・石器・土製品・玉類・種子などが出土。土偶・石柱・石棒・埋甕は、飛騨・北陸地方など東日本から伝播したもの、打製石斧・石皿・擦石・石包丁は農耕とかかわる石器、土製紡錘車は、紡織に関係する道具とされており、そのつくり方は弥生期の紡錘車につながらないという。

【橿原遺跡】（奈良県橿原市）、橿原神宮外苑にあった遺跡。縄文晩期の東北地方でやたらと使用されていた亀ヶ岡式土器、関東・東海系の土器が大量に出てきた。一方、橿原で造られた縄文晩期の土器（滋賀里式系の土器）は、東北南部・関東から北九州にかけて分布する。

【滋賀里遺跡】（滋賀県大津市）、比叡山の南東麓に広がる縄文晩期（三〇〇〇年前）の遺跡で、近畿地方では最大級である。弧状紋のある黒褐色の浅鉢と模様のない深鉢を組み合わせた様式の滋賀里式土器が大量に出た。

これに合わせて、東北地方晩期の土器や北陸地方晩期の土器、黒褐色の浅鉢が出てきた。

この時代のことだろうか、那珂つ国王は死返玉・道返玉・生玉・足玉・葉細の玉・足高の玉・赤石の玉など玉つ宝七つを奉じながら、

「もし痛むところ有らば、この十種の宝をして、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と云いて振るえ。ゆらゆらと振るえ。かく為せば、死れる人は反りて生きなむ」という呪文を繰り返し唱えることで、不老不死が叶うと信じて神国三昧に明け暮れていた。

晩期前半になると、那珂つ国は春秋期に横行した損得や我欲で以て物事を処理する気風に染まったのか、国としての信義や交易の利を捨ててまでして東の領土拡大に突っ走った。

# ◇海神（龍神）と不老長寿の仙薬・蓬莱郷づくり

以上は筆者が考古学から推し測った縄文史観であるが、縄文晩期〜弥生期の国情について、もっと詳しく知り得る文献や術はないのか。ここに目的を絞って、『史記』などの中国史書・中国仙話、古社の祭祀や縁起、地名を手がかりに探って行くと、以下の資料が続々と見つかる。

- 一、天帝配下の海神は、渤海の東海上に浮かぶ蓬莱・方丈・瀛州など五神山も管轄してきた。
- 二、戦国期の斉の威王（前三七八年〜）・宣王（前三一八〜前三〇一年）、燕の昭王（〜前二七九年）の頃から、使節や探検隊を東海上に送り、蓬莱・方丈・瀛州など三神山の探索が始まった。
- 三、秦始皇帝が方士徐福に対して、蓬莱三島に住む海神大神や仙人から不老不死の仙薬を授かって持ち帰るように命じ、東海上に送り出した。

四、漢武帝が不死身の仙薬を願望して神仙三昧に明け暮れ、数多の方士らに騙され続けた。

五、我が国でも、蓬莱と呼ばれた霊山や聖地、蓬莱三島に由来する三島の地名が各地に残る。

六、富士山や熊野山が蓬莱山と呼ばれたり、垂仁陵が宝来山古墳と呼ばれたりした。

七、海神（龍神）を祀る神社、龍宮伝説、不老長寿の妙薬（アワビなど）伝説が各地に残る。

八、海神やその配下の大山祇族・三島氏らが揃って神仙思想を唱え、不老不死の実現に邁進した。

ここから、那珂つ国一門が戦国期から不老不死の実現に奮闘してきた歴史が見て取れないか。中国や日本に限らず、海神は世界中の神話に登場してくる。いずれも海と関わる高位の神とされた。ギリシャ神話のポセイドン、ローマ神話のネプチューン、天竺のナーガがこれにあたる。

中国仙話に登場してくる海神は、竜や鰐の背にまたがり、東の海上を北海から南海まで駆け巡って支配する海の神とされてきた。時には風神に化身して、強風を巻き起こしたという。

仙話によると、三皇と呼ばれた古代帝王の中で、伏羲は上半身が人間、下半身が蛇の姿で描かれてきた。続く五帝期最初の黄帝も、神竜にまたがって昇天したとされる。古代には、蛇や竜は至上

を表す言葉だった。

中国の海神（龍神）については、「山海経」、「中国仙話の開闢編」、「史記」などにこうある。

①「黄帝の児禹猯は東海、その孫禹強は北海に住み、いずれも海神である」、「東海の島嶼上に人の顔、鳥の体をした神人が住んでおり、耳に黄蛇二匹をかけ、足で別の二匹を踏みつけている」

②「渤海の東海上に、垂直に切り立つ帰墟ききよなる溪谷があり、その周辺海上に蓬萊・方丈・瀛州など五神山が漂っていた。その山頂に並び建つ黄金づくりの楼閣に、仙人らがのどかに暮らしている。楼閣を囲む欄干も、辺りを飛び交う鳥も、走り回る獣も、白一色からなっており、辺り一面に美味な果実がたわわに実っている。それを口にするだけで、不死身になれるという」

③「天帝は風神も兼ねる北海の海神（天帝の孫）に対して、『帰墟にたどり着くだけでも、至難の業だ。増して、漂っている五神山の仙人に出会うなど、命がいくつあっても足りぬ。これを陸地近くまで引き寄せ、漂流せぬように工夫せよ』と命じた。

普段は、竜二頭の背にまたがっている海神は、北海にある時は鯨か鯨に化身し、南海では鰐の姿となって駆けずり回った。その結果、五神山は陸地に少しずつ近づいたが、途中で、二つは北海に流されたり水没するなどして、蓬萊・方丈・瀛州の三神山だけが残った。

大陸の人々は、さほど遠くない海上に三神山が浮かんでいると聞くと、遊びがてら訪問して海神大神から不死身の仙薬を手に入れたと望み始めた。この噂が国王や皇帝の耳にまで達した」

④黄帝の妻の一人・皇娥が東の天帝の子と通じて生まれた若者は、東の天帝に昇った。そのまた児が渤海の東海上に出て帰墟なる島々に渡り、在郷の海神らを従えて神仙の国を建てた」

⑤『史記』「淮南衡山列伝」、斉人で徐市（徐福）と名のる方士が始皇帝に上書して言った。

「東海中に、しかと三神山を見つけて参りました。その名を蓬萊・方丈・瀛州と呼び、そこに仙人らが住むことも確かめて参りました。私がその大神にお目通りしたところ、

『西の皇帝の使者であるのか。何を探し求めに来たのか』と尋ねられました。

私が、『皇帝の命により、不老不死の仙薬を探しております』と答えると、海神でもある大神は『秦王の供物が少ない故、おまえはそれを見ることはできても手にすることはできぬ』と言いつつも、私を東の彼方、蓬萊山にお連れ下さいました。その山の麓に楼閣が建ち並んでいました。古来、仙人は二階建ての楼閣に住むと聞き及んでいましたが、それが本当だと悟った次第です』⑥『史記』秦始皇本紀三十七年、「八年後、始皇は会稽山から瑯邪台に立ち寄った。その時になつても、徐福は仙薬を入手できないどころか、偽りを重ねて言い逃れに終始していた。

『不老不死の仙薬を手に入れる目途は立っておりますが、そのつど大鯨に出くわし、未だ蓬萊山に到達できないのです。どうか、弓術の達人に強弩で射止めるようお願い下さい』

始皇をだまし通した徐福ら一行は、広大な平野と沼のある島にたどり着き、そこに住みついた。ままで二度と故郷に戻ってくることはなかった」

一方、日本の海神も中国の伝承と符合する形で、蓬萊三島・三神山、竜宮・龍神と密接につながってきた。往古、海神の先祖は、織物、造船・航海術などを携え、アジア各地から渡来して、独自の神仙術・蓬萊思想、蓬萊郷づくり、不老長寿の薬と称する仙薬を編み出してきた。

現に、富士山・熊野山などの霊山や熱田神宮辺りは、古来、蓬莱山、蓬莱郷、蓬莱島と呼ばれてきたし、蓬莱山や蓬莱島にまつわる海神や配下の大山祇神・三島氏・ワニ族・安曇氏を祀る古社は、各地に数多存在する。三島の呼称が蓬莱・方丈・瀛州に由来するのも、皆の知るところだ。

海神や蓬萊三島の噂が古代中国に広く知れ渡っていたのは、この経緯があつてのことだ。

彼らが神仙思想に拠る不老不死の実現に入れ込んできたのは、「記紀」にある豊玉彦の海神宮(龍宮)伝説、「法皇熊野那智山御参詣事」、浦島子の龍宮伝説、海神系古社の伝える祭祀や縁起、富

土山を不老不死の山として崇める大山祇系の祭祀や縁起などから、はつきりと見て取れる。

〔海神族の進出と拠点〕、新石器時代から縄文中期に渡来したと思しき海神族は、琉球諸島から関東沿岸にまで揺るぎない地盤を築いてきた。その遠祖は、東南アジア・ヒイリピン、中国の南岸地帯・江南・江東、南洋諸島など様々だったが、漁業と航海を生業にすることでは共通していた。

これら海神族は、丸木舟による航海術、手づかみ漁・弓射漁・刺突漁・潜水漁を携え、琉球諸島、薩南、五島（知訶島）、九州の西南海・西北海、玄界灘や博多湾に面する志賀島（近島）、出雲・丹後・若狭、琵琶湖周辺、瀬戸内海沿岸、熊野灘沿岸・伊勢湾岸、東海・伊豆、東京湾周辺、霞ヶ浦周辺に進出していった。

〔海神を祀る古社〕、海神を祀る神社としては、志賀海神社（福岡市）、海神社（対馬市）、和多都美神社（対馬市）、海神社（神戸市）などが著名だが、これ以外に西日本だけでも、海神社（紀の川市）、海神社（島根県隠岐郡）、海神社（豊岡市）、福山市、倉敷市、徳島市、越前市、宮崎市、伊勢市、和歌山市、大津市、霧島市、安曇野市、宮津市など数え上げれば切りがない。

丹後の籠神社、出雲の杵築大社、佐太神社、熊野那智大社、湖西の白髭神社など、名だたる古社も、海神を主神として祀ってきた痕跡がいくつも残っている。

志賀、鹿島なる地名も、海神と関わってきた証拠と見なしてよい。滋賀県大津市志賀、長野県志賀高原、島根県八束郡鹿島町、茨城県鹿島郡鹿島町、佐賀県藤津郡鹿島町がこれに該当する。

〔志賀海神社〕（福岡市東区）、祭神は海神三神。海神の総本社で、龍の都の異名がある。最初の司祭者は安曇磯良とされるが、元来の創祀は縄文時代まで遡ると考えても、矛盾するところはない。

〔和多都美神社〕（対馬市豊玉町仁位）、祭神は彦火火出見尊・豊玉姬命、渡海大明神。わたつみ

浅茅湾北部の入り江、仁位浅茅湾際に鎮座して古くから渡海宮と称し、竜宮伝説を伝える。

三韓征伐を先導した安曇磯羅は、竜宮に住む海神から潮の満ち引きを操る潮満珠・潮干珠を借り

受け、これを神功に献上した結果、千潮・満潮を操り、戦わずして新羅を降したという。

海神、大山祇族・三嶋族と深く関係してきた蓬莱山や三島の地名は、東海上に浮かぶ蓬莱・方丈・瀛州の三神山（三島）に由来するし、富士（不死）山・熊野山・金華山などの霊山も、熱田神宮辺りも、古くは蓬莱山、蓬莱島と呼ばれてきた。

一方、海神配下の三島族が大山祇神一門を祀ってきた古社も、各地に散在している。攝津の三嶋鴨神社、富士山南東の三嶋大社、伊予大三島の大山祇神社、富士山本宮浅間大社がそれで、三島族が海神や大山祇神の配下として東奔西走してきた様子が見て取れる。

「海神族の分裂と衰退」、中国仙話、『史記』、『記紀』神話などから推し測ると、海神大神、大山祇・三島の神は、前四世紀頃から中国にその名が知れ渡っており、西日本はおろか東日本においても大勢力だったのは疑問の余地がない。

ところが倭奴国王朝が興るや、衰退の一途を辿り始めた。その主因は、二世紀後半に天竺から渡来した御仁が仏法や常世づくりを唱えて各地で流布し、瞬く間に海神の神仙・蓬莱郷づくりを上回る勢力に発展したことにある。足元をすくわれた海神は常世づくりにも取り組んだが、時勢には逆らえなかった。

大乱前の伊弉諾は、海神本家を対馬や杵岐に閉じ込めると、配下の三分家を取り込むべく太氏と<sup>おわたつみ</sup>もども大海神（海神大神）<sup>おおかみ</sup>家を建てさせ、残りの海神族を統治させた。

その際、嫡子の少童三人を人質に引きとった。禊払い時に誕生する海神三神は、この少童三人<sup>わたつみ</sup>が興す分家である。落ち目の本家筋を継いだ養子の豊玉彦は、大乱後の一時期、大山祇家と共に邪馬台国に加担して南九州に進出するが、火火出見を婿養子に迎えるや、大山祇家（火瓊瓊杵の婿入り先）ともども火火出見一途に仕えてきた。

● 天之国とオロチ敵之国王朝／太伯ら子孫と越オロチ族

前五世紀前半、越に滅ぼされた呉の一門は、生きる当てもない難民となつて各地を放浪する者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出を図る者が跡を絶たなかった。そうした中で、ひとときわ明るい噂が彼らに舞い込んできた。

「東の海上に戦争も略奪もない蓬莱郷があると聞く。現に、そこから神仙薬を携えてやつて来た者もいるという」

この噂に夢をつないだのか、呉本家筋の太伯ら子孫は筏船や帆船に乗つて東海上に漕ぎ出すと、対馬暖流を横切つて琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸にたどり着くらしい。

彼らは北上して唐津湾岸に到ると、菜畑や曲り田など湿地帯に分け入つて水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇つて太陽（日）になつたと信じて先祖祭祀に入れ込んでいた。いつの頃か天<sup>あめの</sup>之国と称して、日の鏡・興つ鏡・辺つ鏡で以て祖霊を日の神として奉つてきた。

そうする中で、熊本平野の熊族が擦り寄つてきたことで、福岡平野の那珂つ国にじわじわと近づいていった。

那珂つ国がこのよそ者にどう反応したかは知る由もないが、中国神話や考古学から推察する限りでは、以下のところに行き着いた模様だ。

「天地開闢の神話にあるごとく、天之国と連携した天地なる国体の下で、東の縄文勢にあたるのが古から伝わる正道だ」

【菜畑遺跡】（佐賀県唐津市）、夜臼式期（縄文晩期末、本書のいうオロチ敵之国王朝期）の水田跡下層から、さらに百年以上も遡つた縄文晩期後葉（前五世紀中頃）の水田跡四枚や山ノ寺式突帯文系土器が出た。炭化米も二五〇粒ほど出土した。そこでは、直播きだった。

【曲り田遺跡】（福岡県糸島市）、周囲の水田より二〇数倍ほど小高い丘陵上にある。遺物の

見つかる最も古い地層から山ノ寺式土器（前五世紀頃、菜畑遺跡と同時期）、竪穴式住居跡三〇、住居跡から厚さ四ミ<sup>メ</sup>、幅四<sup>テ</sup>の鉄片一、支石墓一などが出た。

支石墓は墓壙に火葬骨を埋納して丹塗りの小壺（山ノ寺式）を副え、その上に四〇×三〇<sup>セ</sup>の花崗岩を据えたもの。十六粒の炭化米や土器に付着したモミの痕跡も検出された。

彼らは渡来早々に海神一派を配下に取り込み、海部<sup>あまべ</sup>、海部<sup>あま</sup>、海部<sup>あま</sup>、白水郎<sup>あま</sup>、海士<sup>あま</sup>、海女<sup>あま</sup>と呼んできた。男の海士は航海や漁法に熟達し、海女は素潜りでアワビ・サザエなどの捕獲を生業にしていた。

その後の天之国は、熊族を介して那珂つ国に接近し、江東流国づくりや集落を濠で囲って身を守る術を教える一方、那珂つ国の集落に分け入って水田稲作の手ほどきをするまでになった。

こうした努力を何代にもわたって積み重ねた結果、那珂つ国の庇護下で山陰道・山陽道に分国を立ち上げたり、奈良盆地の橿原辺りに出先を開いたりすることができた。

そうした中で、那珂つ国は天之国ともども天地と銘打って大がかりな東征軍を編成し、再度北陸や東海に攻め込んだが、またも縄文勢に打ちのめされてしまった。

前三三四年ころ、今度は越が楚に滅ぼされた。越王は禹や夏后帝小康の末裔とされる。この時期に、長江、淮河流域、齊に広がっていた越人らは、楚の迫害を恐れるあまり、北の遼東や朝鮮に逃げ込んだらしい。越が支配してきた土地でも、ある一門は江南の海岸沿いに割拠しつつ再起を窺っていたが、いつの間にかやがて楚の傘下に組み込まれていた。

そうした中で、本家筋に近い一門が郎党ともども帆船に分乗し、風の便りに聞き知った蓬萊三島に新天地を切り開くべく東海上に漕ぎ出した。

この一団も琉球諸島沿いに北上して薩摩半島坊津辺りに襲来するや、瞬く間に半島を占領して堅固な足がかりを築いた。ついで遠征軍を編成して、不知火海・八代海・島原湾沿いに北上した。

その狙いが肥沃な筑紫平野や、那珂つ国の都する福岡平野の攻略にあったのは言うまでもない。

この侵略者に対して、那珂つ国や天之国がどう立ち回ったかは伝承の一つすらないが、地名・考古学・後世の祭器の有り様から推測すると、以下のところに行き着いた模様だ。

「那珂つ国と天之国の連合軍はあっさり負けてしまい、那珂つ国は閭見国や杵築国ともども辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国は配下に組み込まれた上に、越流米づくりを強いられてきた」

その際、那珂つ国や天之国の配下らは、どう動いたのか。那珂つ国に長年仕えてきた海神大神や火の国は、敵にこそ回らなかつたものの、洞ヶ峠を決め込んだまま動こうとしなかつた。

天之国配下に潜り込んできた熊族は、またも寝返って越オロチ族の旗下に走り、那珂つ国・天之国・火の国に襲いかかったらしい。

その後、彼らは福岡平野にオロチ敵之国王朝を立ち上げると、天之国が苦勞して切り開いてきた曲り田・菜畑などの水田をことごとく没収して、区画を広げて収穫増を図ったり、板付など新たな湿地帯を開墾するなどして越流米づくりに励んできた。それと同時に、佐賀平野の吉野ヶ里丘陵に一門の重鎮を策封して筑紫平野に睨みを利かせてきた。ついで海神大神と組んでオロチ敵之国家の宗像家を共立して、夏王朝のごとく筑紫島を九つの州に分けて統治してきた。

やがて国のかたちが整ってくると、時の敵之国王は夏王朝に倣い、オロチを祖霊の再来と崇める先祖祭祀に入れ込んでいた。

そうした中で怒濤のごとく東征して出雲、摂津、奈良盆地、北陸に進出し、佐太国・三輪氏・高志国などを策封するや、電光石火のごとく東海に攻め入った。

その後は、天之国や中つ国に追隨した先住民らに生命の安全や生活の糧を保証する代わりに、手足のごとくこき使って各地に水田を切り開き、王朝の礎を築いた。



【中西遺跡】（奈良県御所市）、近年、二四〇〇年前の水田跡が約九千平方<sup>メートル</sup>にわたって出た。これまでに確認された水田跡面積とあわせると、二万平方<sup>メートル</sup>もあつて、この時期では最大。

【服部遺跡】（滋賀県守山市）、近畿地方で初めての発見となつた約二三〇〇年前の水田跡は、農道や排水路を備える本格的なものだつた。

水田稲作がこうまで短期間に東方に伝わつたには、それなりの理由がある。越オロチ族に限らず、その後の渡来人たちも先住民の集落や水田を奪つた上に、米づくりを強要してきたからだ。このことは曲り田・菜畑・板付遺跡の水田跡が何層にも重なることで、容易に見抜けるはずだ。

ところで、本家に祭り上げられた宗像家やその配下たちは、その後どうしていたのか。彼らは福岡平野の板付辺りに都すると、瑞宝十種みづのたからとくさを天璽あまつしるしに奉るオロチいづの厳之国王朝と銘打ちながら、一門や天之国・中つ国勢に対して天命と称する詔を矢継ぎ早に降していた。

その瑞宝十種とは、死返玉・道返玉・生玉・足玉、瀛つ鏡・辺つ鏡、オロチ族軍団を統率する八握劍（細形銅劍）、船団を指揮する際の蛇の領巾（浪振る領巾・浪切る領巾・風振る領巾・風切る領巾）、それに蜂の領巾・品物の領巾だつた。この中の玉四つや蜂の領巾・品物の領巾は那珂つ国から奪つた神宝、鏡二面は天之国から強奪した鏡だつた。

熊族も那珂つ国から熊の神籬を取り返した上に、玉三つ（羽太の玉・足高の玉・うかかの赤石の玉）を奪い、天之国からも日の鏡をもぎ取って熊族神宝として奉つてきた。

時がたつて、遼東や朝鮮に散らばつていた越遺民らは、越オロチ族が蓬萊島での領土を急激に拡大しつゝあると聞くと、近隣の夷人や苗族、さらに朝鮮の人民まで誘つて対馬海峡をひっきりなしに渡つてきた。この時代の遼東や朝鮮に由来する金属器・水田稲作・石器類が西日本各地から出てくるのは、これがためである。

前四世紀終わり頃になると、北陸に押し入った勇猛果敢な越オロチ族は、越の本家筋にあたるとして威張り散らしたり、何ごとにも先祖の教えをもち出したりする性癖が災いして、先祖がえりする体質に陥っていた。

淀川西岸に定着した越オロチ族は牟礼（茨木市）辺りを拠点にして、広大で肥沃な所領を守り抜いたことで怖いもの知らずの小千族と強がついていたが、本家筋からあてがわれた主君に唯々諾々と仕える体質から抜け出せなかった。

奈良盆地に押し入った越オロチ族は縄文勢を四方に追い払った後、三輪山を仰ぎ見る地に堅固な砦や広大な所領を手にして、本家を上まわるほどの勢いになった。

いつの頃か、彼らは淮河周辺から流れて来た淮夷、山東から渡来した東夷、湖南からやって来る苗族を身内に抱え込むことで、蛇神崇拜に加えて東夷の夷神信仰や苗族の八卦占いもあわせ持った。それ故、三輪氏と称してきた。これは、大神（三輪）神社の祭祀形態からも見て取れる。

彼らは財力や軍事面で本家に見劣りしなかったことで、東方を取り締まる副都の役目を担ってきたが、北陸のオロチ族と同様、先祖返りして卜骨による祭祀と政に凝り固まっていた。大事が生じた際には、鬼道を操って祖霊を呼び出し、お伺いを立ててきた。

佐賀平野にあつたオロチ族は吉野ヶ里丘陵に大環濠集落を築く一方、筑紫平野のあちこちに散在する中つ国勢や天之国勢に目を光らせながら、水田稲作に打ち込んでいた。

これら宗像家と嚴之国分家は何代にもわたり、海神族と混血を繰り返してきた。その結果、宗像系の海人が誕生したのである。その子孫は筑前宗像の鐘崎を拠点にして、海神の伝手を頼りながら筑後・肥前・杵岐・対馬、豊後に広がり、そこから日本海側の出雲・丹後・若狭、越前・能登・越後に進出した。その仲間たちも瀬戸内から熊野・伊勢湾岸に拠点を進めた後、さらに東海・伊豆、東京湾、房総・常陸、陸奥に進出していった。

## ●倭国王朝の建国

前二二一年に、秦が中国を統一した際も、「会稽の東海上に、蓬萊・方丈・瀛州の蓬萊三島が漂いながら浮かんでいる。その島の人々は、不老不死の仙薬をたしなみながら長寿を保ってきた」

との噂が広まっていた。始皇帝は自身の不死身を願望するあまり、徐福の上奏、つまり「私めが物忌みをして身を清め、童子・童女を連れて不老不死の仙薬を探し求めに出たく思うのですが」という案件に、ためらわずに決済した。

この八年後、徐福は童男童女三千人を率いて大船五隻に乗り込み、これに五穀の種・農器具なども満載して東海上に向けて船出した。徐福伝説が佐賀県・和歌山県に多々残るところをみると、徐福らは蓬萊三島に無事にたどり着いた模様だ

〔蓬萊山〕、寧波市近くの慈溪市にそびえる蓬萊山近辺には、「徐福が東海上の蓬萊山に向けて船出した」という伝説が方々に残る。蓬萊山は、東海上の蓬萊山に到達できる山の意である。

〔吉野ヶ里南方に伝わる徐福伝説〕（佐賀県旧佐賀郡）、「徐福の船団は鳳凰の飾りをつけた帆船が先に進み、次に龍を象った帆船が続いて擲（からみ佐賀市）の海岸に到った。その際、徐福は海に大きな酒盃を浮かべ、それが東擲の岸に流れ着くのを見届けてから童女二百人・童男五百人を上陸さ



6千年前〜一世紀の渡来人 想定図

せた。以来、その地は浮盃ふばいと呼ばれてきた。

彼はそこで農耕や養蚕を指導したり、金立山（標高五〇一呎）に分け入って薬草を探すなどしていたが、その後は何処ともなく立ち去った」

☆金立山の頂には、徐福を祀る金立神社が鎮座して、徐福を祀っている。

### 〔熊野に伝わる徐福伝説〕

（和歌山県新宮市）、始皇帝の命を受けた徐福は、不老長寿の仙薬を求

めて東の海上に船出し、阿須賀神社あすか（新宮市、祭神は徐福）辺りに上陸した。彼は裏山で天台鳥薬てんだいうやくを作る薬草を探して回り、土地の人々に耕作と捕鯨術を教えて天寿を全うした」

この二十年ほど前、秦に祖国を追われた流民らの間でも、蓬萊三島の噂が飛び交っていた。そうした中に、祖霊が太陽に化身したと信じる武装集団が、心安らかに先祖祭祀できる楽土を求めながら、東へ流浪していた。晋分家の韓一門である。

彼らは百官や百戦練磨の軍隊、それに陸稻づくりには長けた農民らを数多引き連れ、遼東から朝鮮半島に向けてひたすら行軍していた。半島の東海上に漂いながら浮かんできると聞き知った蓬萊三島に、殺戮も戦争もない楽土を築きたいと思いつめた末の行動だったようだ。

『史記』『韓世家』、「韓の歴史を遡ると、その公室の先祖は、周と同じく姫氏を姓とした。（前七世紀中頃）、これにつながる韓武子が晋（周分家、始祖は周成王の弟・唐叔虞）の献帝に仕

えて韓原（陝西省）に封じられ、三代後の韓厥が封地にちなんで韓氏と語り始めた」  
ここで、秦と燕の関係、燕と朝鮮との関係についても知っておこう。

殷の箕子が朝鮮に封じられて八〇〇年以上たった戦国末期（正確には秦が韓を討った三年後）に、遼東にあった燕の太子が個人的恨みから、秦王のもとに使者を装った刺客を放った。手土産は、

秦に割譲する土地の地図、それに秦王政の怒りにふれて遼東に逃げ込んだ將軍の生首だった。

秦王に面会できた使者は隙を見て、猛毒を塗った剣でいきなり秦王に襲いかかったが、あと一息のところで逃げられた。

五年後の前二二二年、秦の大軍が遼東に殺到して、燕王喜を虜にした。翌年、燕から南下した秦軍が斉の都になだれ込んで斉王建を虜にした。

当時、箕子の末裔で朝鮮侯だった準は、燕・趙・斉から逃亡してきた難民が朝鮮に流れてくると、これを快く迎えて南の馬韓西部に住ませた。その後も、秦の労役を嫌った逃亡者や難民らが朝鮮に流れ来たことで、彼らにも馬韓東部を割いて土地を分け与えた。そのことから、この地は秦にちなんで辰韓と呼ばれるようになり、馬韓から辰王を迎える慣わしが始まった。

ところが、秦が滅亡して漢朝が興る直後の前一九五年、人の良い準は遼東から流浪してきた衛満（衛氏朝鮮の祖）に朝鮮を乗っ取られてしまい、数千の領民と共に南へ逃げる羽目になった。

その後、海から馬韓に侵攻して辰王を打ち破ると、朝鮮との関係をきっぱりと絶って韓氏と語ってきた。

同じ頃の日本列島では、水田稲作と共に遠賀川式土器が東海まで急速に広まっていた。そうだとすると、韓が滅亡した前二三〇年から衛氏朝鮮の興る前一九五年までの間に、中原の韓原を發った韓一門が朝鮮半島にごっそり移動してきたと見ても、何ら不思議ではない。

朝鮮半島南端に至った韓勢は、一門や配下を要所要所に配置して背後の守りを固めた後、蓬萊三島と思しき筑紫島（九州）を目標して対馬海峡をひっきりなしに渡って行った。そして唐津辺りに上陸して軍を整えるや、圧倒的な武力で以て四方の制圧に乗り出していった。

辺りの山間や海辺には縄文時代の昔から狩猟民・漁労民が住みついていたし、小高い平原・なだらかな丘陵地帯にも、那珂つ国勢が決まって集落を構えていた。また低地の住みよい土地、めぼ

しい湿地帯、入り江・河川近辺には江東や江南から渡来した呉・越・楚の渡来民らが水田稲作や漁業に専念していた。遙か離れた東方では、厳之国分家率いる王朝軍が東海や北陸の縄文勢と相変わらず小競り合いを繰り返していた。

その状況下で、韓勢と王朝方は人や土地の支配をめぐって、あちこちで激突を繰り返した。その中でも、オロチ厳之国の武闘派はめっぽう強かった。双方とも相手を叩きのめしにかかった結果、オロチ軍が手痛い傷を負って後ずさりし、代わって天之国勢が前面に押して出てきた。

両者は押したり引いたりする中で、互いの祖先が周の古公亶父に繋がる姫氏姓と悟るや、一転して周にも優る国をこの島国に共立したい想いに駆られたのか、内密に好を通じあつて盟約に走った。その国都も周の太陽信仰にちなんで陽茂台（倭）ヤシマオト ヤマトと命名され、唐津湾岸の一角に都した。

朝鮮半島に取り残された韓人らは、その藩屏となつて仕えることを誓いながら、韓にあやかつた国々を打ち立てた。それが後世の馬韓、弁韓、辰韓なのである。

その後、敗れ去つた厳之国一門はどうなるのか。オロチ族武闘派は摂津の小千族や、北陸のオロチ族を頼つて落ちていく他になかつた。

厳之国本家の宗像家は、宗像地方や遠賀川流域に閉じこもつて謹慎していたが、いつしか天之国にすり寄つて行つて、天之国一門として立ち回っていた。

こうして、倭を共立した韓・呉・越の末裔らは、末代までこの国を支えあうことを誓いながら、日高が日の国（佐賀・長崎・熊本県）の守りを固めた。天之国は、筑紫国（福岡県・大分県北部）の守備を受け持った。後世の倭国も、前王朝に仕えていた一門を挙つて身内に取り込み、天（厳）之国とも称してきた。

ほどなく、倭が水田稲作に本腰を入れ始めたことで、朝鮮半島に住む農民らが北九州に続々と渡

つてきた。その結果、朝鮮半島の稲種や農器具による水田稲作が急速に広がっていった。

同じ頃、火神を尊ぶ楚の王族一門や、長江中流域の農工漁民・苗族・山東の東夷・淮水周辺の淮夷、秦の過酷な徴用から逃げ出した人々が大河を利用して海岸地帯に群れ集まってきた。

その一部が筏船や帆船に乗って東海上に漕ぎ出し、北流する対馬暖流を横切って薩摩半島や大隅半島に至った。その中の苗族・東夷・淮夷らは、ずっと以前から波状的に渡来してきて三輪家中に潜り込んでいたが、今回も同様だった。その全てを寄せ集めても、朝鮮半島や呉越からの渡来人に比べると、はるかに少なかったろう。

薩摩半島から西海岸沿いに北進した楚の一团は、たちまち火神の勢力や熊族に組み込まれた。

後世、この地域が熊襲と呼ばれてきたのは、楚人や熊族の神聖動物に由来するかも知れない。

その後も、ばらばらとやって来る楚や斉からの渡来人たちは、さほど大きくない河川の河口に船泊まりや住処を見つけるや、そこから遡って上流域を開墾しにかかる習性を持ち合わせていた。それが彼らの故国での生き様だったようだ。

いつの頃から、その中から天竺の常世思想やバラモン神の教えに精通し、かつ楚国伝来の銅精錬に長けた太氏鴨族が台頭してきたり、鉄器づくりから製鉄に手を広げる集団が出てきたりした。

☆『史記』に目を通して、彼らの遠い先祖と思しき楚の君について知っておこう。

「楚世家」、「楚の君の先祖は、熊の化身とされる黄帝の孫から出た。五帝期の重黎は火の正



を業<sup>つとめ</sup>て大きな績を上げ、(夜の) 天下を火の光で明るく照らしたことで、祝融なる誉ある称号を賜った。弟の呉回がその職と称号を引き継ぎ、その末裔が殷の頃から名前に熊の字を添えるようになった。

周の時代に、成王は文王・武王のために献身的に仕えてきた臣下らの末裔を高位に就けたが、武王に尽くした熊麗や熊狂の末裔も、楚の蛮族の地で子爵に封じられて丹陽に住むこととなった。

この地方では、春秋から戦国期初めにかけて、製鉄技術が飛躍的に発達して鉄製武器が盛んに造られてきた。製鉄は楚の地で興り、鉄を鋼鉄にたき上げる技術は呉越で開発されたともいう。古来、この地方を治めた火神一門は銅精錬や製鉄に長けた集団を統率してきた歴史を振り返ると、楚の君の末裔がこれに関与してきて当然だ。

倭による支配が微動だにしないと分かると、それまで敵之国配下として東方に散らばっていた苗族・夷族・諸々のオロチ族・鴨族・ワニ族らが東国勢に競り勝ちたい一心から倭の軍門に降ってきた。三輪氏が彼らを身内に抱え込んで倭国に傘下入りしてきたのは、この頃かも知れない。そうした中であつて、北陸に割拠する越のオロチ族は、頑として倭に服そうとはしなかった。彼らは国境を固く閉ざしたままで敵意をむき出しにしてきた。

その後も、倭は水田稲作の適地を見つけては、先住民をそこに移して米づくりに駆り立ててきた。こうした集落が加古川・明石川・猪名川・淀川・大和川・紀ノ川の流域、河内湖・琵琶湖周辺に広がると、近くに環濠で囲った倭分国を立ち上げ、水田稲作の指導や監督に当たらせてきた。

同時に、モミをつめ込んだ遠賀川式の壺が九州から大量に運び込まれてきた。この時期にも、西日本での水田稲作が急速に広まった。本書では、これを弥生時代の幕開けとしている。

水田稲作の拡大につれて、唐津の都が活気づくと、大阪湾岸の南に副都が設置されることになった。

周の歴史からもわかるごとく、周の流れを汲むこの王朝は、周の統治制や身分制度をそっくり真似たり、分家を要素所に封じたり、東方を束ねる副都を置くなどして、周政治の再現に努めてきた。

一方、策命時にそれ相応の義務を背負われた倭分家も、直臣を率いて所領に居住しながら領民（縄文勢・中つ国勢・カモ族ら）の社稷（土地の神や穀物霊）を合わせ祀ったり、本家の外婚制度に沿った婚姻を重ねるなどして領民との同化に努めてきた。

前二世紀中頃、時の倭王は筑紫島と都の守備を豊国に委任するや、将兵を総動員して東方の領土拡張に突っ走った。この東征軍はオロチ軍を先頭に押し立てながら北陸や東海に攻め入ったが、若狭辺りで越のオロチ族の猛反撃を食らい、それ以上は一步も前進できなかった。

太平洋側でも東北から繰り出してきた東勢に押し戻され、一進一退を余儀なくされた。双方はそこで長期間睨み合ってきた。

以後、数百年にわたって西と東の異なる文化がこの近辺でしのぎを削りあった結果、ここを境にして、異なる方言や習慣が今に残ることになった。

例えば、「居る」という語は東日本では「いる」と言い、西日本では「おる」という。後世になっても、東では「買った<sup>か</sup>」、西では「買った<sup>こ</sup>」という言葉の違いが残る。生活面においても、

東の、いろり、湯、畑作と馬、騎馬軍団、濃口の味に対して、西では、かまど、風呂、水田と牛、水軍、淡口の違いがある。



【宇木汲田遺跡】（唐津市）、弥生前期末から中期初頭にかけての集落跡。甕棺墓・銅劍五・多紐細文鏡一・銅戈一など多くの副葬品が出土した。貝塚から弥生前期末（二一〇〇年前）の土器、炭化米が出た。甕棺内から細形銅劍二・銅矛二・勾玉二・管玉二九・銅鐸の舌が出た。

【東奈良遺跡】（大阪府茨木市）、弥生前期の環濠を伴った集落で、標高四〇五メートルの所にある。環濠の内部から、大型の高床式建物跡・多数の住居跡・工房跡が見つかった。工房跡から、銅鐸鑄型三五点が出た。

【唐古・鍵遺跡】（奈良県田原本町）、北部・南部・西部のそれぞれから、弥生前期の住居跡（一五〇×三〇〇メートル）が見つかり、鍬や鋤の農耕具、斧の柄など工具類、高杯・鉢など木製容器が多数出た。

弥生期最古級の巨大な高床式建物跡（南北十二メートル以上、東西七メートル）も発見された。大型建物跡は吉野ヶ里遺跡や池上遺跡で発掘されたものに比べて、一五〇×三〇〇年も古く、弥生期を通して近畿の拠点的な集落とされる。木製品的大量生産、祭祀や儀礼の痕跡、獣骨を焼いて占った占骨、弥生中期初め（前一世紀）の青銅器鑄造跡とともに銅鐸鑄型・フイゴ羽口などが出てきた。

【朝日遺跡】（愛知県清須市）、尾張平野の海近くの小高い所にあり、弥生期中期の東海地方最大級の環濠集落遺跡。縄文末期の土器に混じり、弥生中期の方形周溝墓群、弥生土器、炭化米多数、銅鐸などが発見された。

【遠賀川式土器の分布】、弥生前期の土器の総称で、伊勢湾や敦賀湾を結ぶ線まで広がった。それ以东は、東北系土器が対峙する形で出てくる。青森県松石橋遺跡でも、遠賀川式と類似する土器が出土した。



遠賀川式土器